# 空襲・被災

# 忘れられない三人のひと

◇秋間　菊枝（69歳）

昭和も二十年に入りますと戦局はますます悪くラジオの臨時ニュースも「軍艦マーチ」がきけず「海ゆかば」と変わってしまい、各店舗も売る品とて無くただ開けているだけの状態でした。店の御主人は軍需工場に行き、若い女性は、挺身隊にとられ、私も病人の兄と母を残して行けませんので、宇和産業に、挺身隊よけに就職しました。夜は安心して寝ることも出来ず、空襲警報におびえ身も心も疲れ果てていました。防空壕といいましても、始めの中は家の中の床をはがし土を掘りましたが、それは危ないとのことで家の前に穴を堀り、上に木を被せたごく粗末なものです。そんなものに命を託さねばならない有様でした。

それは五月二十五日の夜でした。思わず、うとうととしましたら、歩くことすらやっとの兄が二階から降りてきて、私を起こしました。ふと気が付きますとサイレンの音と同時にB29の大編隊の轟音が、しかも押しよせる波のごとく空から迫ってくるではありませんか。「空襲警報発令。空襲警報発令」と防護団の声がきこえてきます。「今夜はきっとやられるよ」と兄の声に母は蒲団を店先に敷き、兄を横にし、側から離れず、私に「早く防空壕に入りなさい」と言いますが二人が心配でとび出して叱られまた入ったものの飛び出し叱られ、その中「ザッー・ザッー・ピュー」と音がしたかと思う中、焼夷弾がおち、あちこちに火の手が上がり始めました。人々は右往左往と逃げ出しました。私は両肩に兄の両手をのせ母と五メートルくらいしか歩きませんでしたのに「もう歩けない」とうずくまって「僕をおいていってくれ、菊枝はお母さんと早く逃げなさい　」と言いますが、大切な兄をどうして見殺しにできましょうか。ふと私は、尾島写真館の脇に担架のあることを思い出し、急いで取りに行き「早く早く」と兄を乗せ持ち上げようとしましたら、何と持ち上がらないではありませんか。「あー駄目だ」誰かと思ってももう誰もいません。ただ薄暗くけむって靄のような中には三人だけでした。いよいよ駄目かな、と思った時「秋間さんのお姉さんですか」という声がしました。「えっ、あなたは？」。見ると若い男性が二人立っています。「僕は秋間君（弟）が軍隊に

出る時、家は病人と女だけだから何かあったらたのむといわれた」とのこと。ありがたく嬉しくそのお二人に火の粉を払い払い御成門公園へ逃がしていただきました。そこで一晩過ごし、町内の人達と愛宕中学の講堂へ落ち着きました。

しばらくしますと故郷へと一人減り、二人減り帰ってしまいます。兄の病状は日増しに悪く、気が気でなく私は、東京病院、済生会へとお願いに行きましたが断られ、八王子の叔母の家に行きたくとも車もありません。困惑していましたら中年の方が、母に「わたしはお宅の旦那にお世話になった者です。自転車でよかったら連れて行きましょう」と言ってくれました。早速ご厚意に甘え、リヤカーに蒲団を敷き、母と兄を乗せました。それでもうれしそうに「お世話になりました」とあいさつをして四谷のほうへゆられながら行きました。姿が小さくなるまで皆さんは見送って下さいました。

私は焼け跡のガラクタを背に中央線にやっと乗り二人の身を案じつつ八王子へと向かいました。車窓から見える景色は、どこまでもどこまでも焼け野原でした。兄は朝四時に出発し午後五時頃着いたとのことで奥の部屋に寝ていて母が思っていたより元気なのが私をほっとさせました。「兄さんよかったわね、今夜はゆっくり寝てね」と言いますと「うん。でも自分の体だか、人の体だか分からないよ。今僕が宏の軍隊の住所を教えるから書きとってほしい」というので私は耳を口元にもってゆき書きとりました。弟は兄だけには自分の住所をなぜか知らせていたのでした。叔母一家の精一杯の厚意に感謝し、私に「後をたのむね」といってその晩死にました。

敗戦後弟は帰ってきました。三人で泣きながら語りあかしました。母は過労と心労で間もなく死にました。丈夫だと思っていた弟は結核で軍隊から帰ってきたのでした。戦争も終り、いつまでも叔母の家にいたのでは迷惑になるからと知人にバラックを作ってもらい二人は浜松町へ帰ってきました。屋根はルーフィング。窓にはガラスがなく障子紙を張りましたら一晩の雨で全部はがれてしまいました。畳もなくむしろの上に蒲団を敷きました。それでも我が家だと思いますと、落ち着きほっとするのでした。裏には、我家の借家にいた人達でしたのでとても親切にして下さるので心強く感じました。ドラム罐のお風呂も交替で入れて下さるのです。しかし、ここへ帰ってきて三月目に、弟もまた死にました。私は泣きました。ただただ泣きました。両親がいて兄弟三人楽しく過ごした事を思い出してはまた泣きました。食事の時は家族の写真をお膳にのせ食べました。でも私は、たとえ一人になりましても最高の教育をさせて下さった両親の顔に泥を塗るようなことだけはしまいという信念で生きてきました。四十五年過ぎた今日でも、最大に困った時に助けて下さった三人の方は、忘れることなく常に感謝しているのです。

# 空襲の想い出

◇天野　文夫（68歳）

当時私は警防団員として日夜勤務し、空襲に備えていました。特に私の役は、警報が発令されると直ちに昼でも夜中でも対空監視哨に駈けつけ、敵機が来襲した時、半鐘を乱打し町の皆さんに危険を知らせ、防空壕に待避するようにうながすという仕事でした。

昭和二十年、日本の敗色がようやく濃くなり、米機の来襲がはげしく、毎日のように私は家の前の産業安全会館（現芝五丁目三十四）の屋上に設けられた監視塔に駈け上り、右手に打器を握り、敵機来襲に目を光らせていました。

三月の何日だったでしょうか、空襲警報が発令され私はいつものように監視塔に駈け上り一人配置につきました。真昼間でした。突然東北東の方角の建物と建物の間から、わき上がるように、グンと急上昇してグラマン戦闘機が現われ、機銃掃射をしたかと思うと、アッという間に頭上をかすめてすぎ去りました。

一瞬の出来事でしたが、私は思わず反射的に首をすくめた位でした。ずんぐりした機体に、飛行帽をかぶり飛行眼鏡をかけた操縦士の顔がハッキリ見えました。私は夢中で半鐘を乱打しましたが、敵の機影はもう小さくなっていました。あとで聞いたのですが、それは金杉橋あたりを機銃掃射したグラマン戦闘機だったのです。

その後の夜の空襲で田町駅近辺に火災が起こりました。私は例のとおり監視塔に上っていましたが、下から吹きあげてくる火炎と煙のため危険を感じ、もはやこれまでと塔を下りました。その頃路上には市電（都電）が点点と止まっていました。それは車庫に入れておくと全部焼けてしまうおそれがあったからです。

その時も路上に止めてあった電車に火が移りそうになったので、近所の人が二、三十人集まって電車を移動させようとエンヤエンヤと押していました。私もその中に入って押したのですが、ブレーキがかかっているせいかビクともせず全く徒労に終りました。

それよりも何よりも心を痛めたのは、江東地区が空襲され何万という人が焼死し、その死体の処理でした。両国駅のホ

ームに立って東の方を見れば一面の焼野原でした。そして路上には、手足を空に向け、性別も判らず無惨に焼けただれた無数の焼死体がごろごろしていました。また、防空壕に入って焼死は免がれたものの窒息死したのか、防空頭巾をかぶりもんぺをはいて、眠っているようにきれいな顔をして死んでいる女の子。そしてその両親らしい人。あたりは死臭ぷんぷんとして吐き気を催します。やがて兵隊も来てトラックに死体を積み、いずこへか運んで行きました。

その後の死体の処置の模様は書くに耐えません。

毎年八月十五日の終戦記念日を迎えるたびに、今こうして平和に豊かに暮していられる幸福に感謝すると共に、悲惨な戦争を二度と繰返すことのないよう心から祈らずにはいられません。

# 白衣の衛生兵

◇飯島　勝太郎（68歳）

大正十二年九月一日の関東大震災の時、私は二歳で芝新網町に住んでいて、舟で金杉橋より東京湾に逃れたと母からよく聞かされました。満洲事変、上海事変、そして大東亜戦争と戦争の惨めさを目のあたり見、今日の日本の平和な時代が素晴らしいと思います。

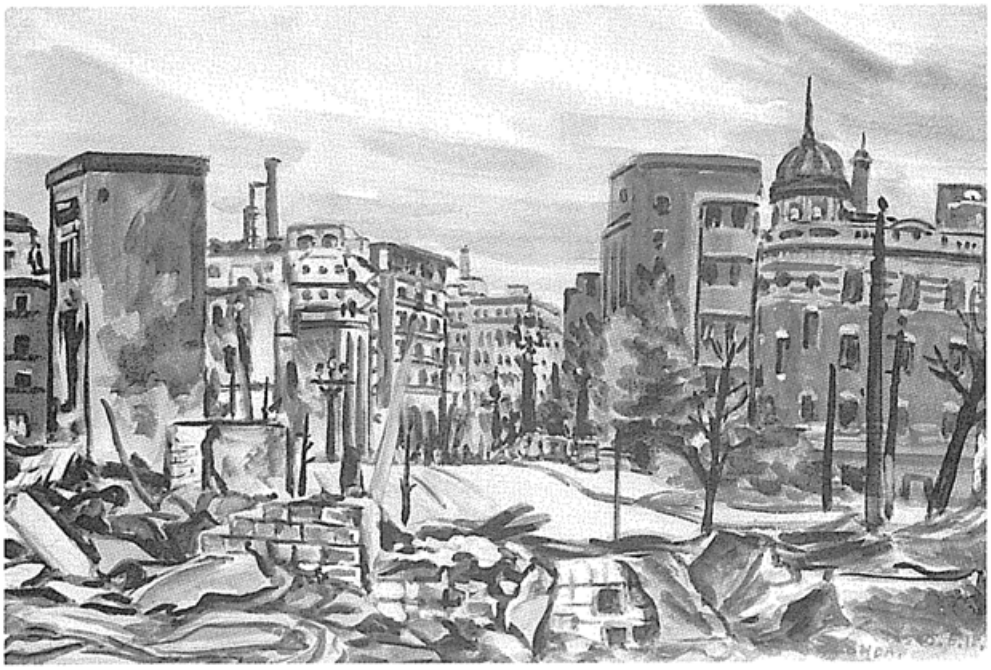
ここで、空襲の恐ろしさ、私の経験等お話しします。

米軍の本土空襲が激しくなった昭和十九年十月頃私は世田谷の野砲隊で衛生兵として勤務しており、神奈川県小出（こいで）村で築城作業（高射砲設置）要員の衛生兵をしていた時、米軍空母から発進したP51戦闘機に機銃掃射され、危うく命を失う事が二度もあり、白衣を着ていたのが目立ったのでしょう。

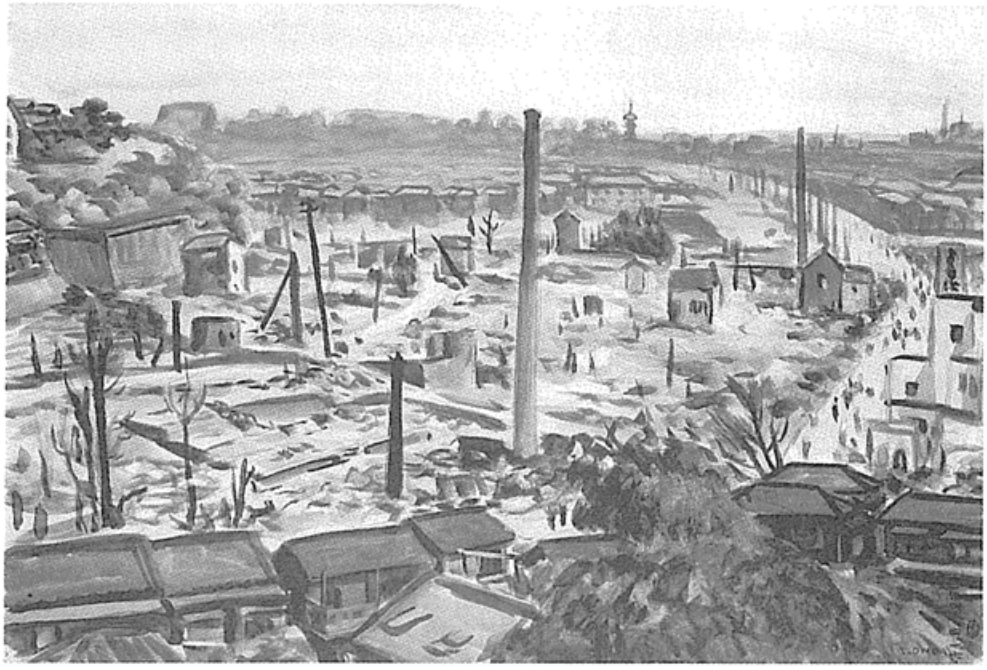
港区の空襲は十九年二月頃だったと思います。芝仲門前町と土手跡の所へ爆弾が落とされ畔高医院の先生一家の爆死等。また三月十日（旧陸軍記念日）の大空襲（下町）本所、深川、浅草等ほとんどが焼きつくされた時、在京各部隊より下町へ焼跡整理、死体収容等で大勢の兵隊が活躍しました。また、五月二十五日（旧海軍記念日）の大空襲の時、夕方より明け方までB29からの爆弾や焼夷弾が雨のように落下し、部隊が丸焼けになり、私共衛生兵は、兵隊の救護と治療のため逃げる事も出来ず、二十六日の明け方防火用水をかぶり、やっとの思いで外に逃げる事が出来た次第でした。私等医務室の廻（まわ）りは厩（うまや）が多く、火のまわりが早く、大変な出来事でした。

千人針　昭和17年

（提供、飯島勝太郎さん）



日本橋にて　（港区立南山小学校元教諭　恩田孝徳画）



麻布十番通りを望む　（港区立南山小学校元教諭　恩田孝徳画）

# 三角巾に包まれた火消壺

◇池田　かね子（81歳）

東麻布森元町に、私達は住んでいました。昭和二十年五月二十五日夜の、最後の東京大空襲は、忘れることのできない悲しい夜でした。

「B29数十編隊のお見舞いだ。今夜はきっと家も焼かれるにちがいない」と、家中みんな覚悟をきめました。もしも生き残ったら、用水槽を目印に、みんなでそこに集まろうと話し合いました。目の不自由な姑（三十七年死亡）、身体の弱い妹（二十三年死亡）、一四歳の息子を芝公園へ避難させ、主人と私は家を守るため残ることになりました。そのうち焼夷弾が方々に落ち始め、昼間よりも明るくなり、火の手が四方に上がり始めました。しばらくして妹が、危険だから一緒に逃げるよう、私達を迎えに来ました。私も主人に、芝公園へ避難するよう言いましたが、頑として家から出ようとはしませんでした。後ろ髪を引かれる思いで、主人の渡してくれた水の入ったヤカンを持ち、妹と共に逃げ出しました。

行く先々で、火のついた槍のように、焼夷弾が頭上めがけて降ってきます。隣にならんで走っていた若い男の人が、「やられた」と言って倒れました。卑怯ですが、私は心の中で手を合わせて走りました。飯倉の通りに出た時には、神谷町方面から三田通りにかけて、火が水のように早い勢いで流れていました。火の海をかいくぐりながら、夢中で芝公園を目指して走りました。

ようやく公園に着くと、大勢の人がいました。大きな木がたくさんあり、危険から皆の命を守ってくれたのでしょう。

私は水で手ぬぐいをぬらし、目に当てました。が、すぐに乾いてしまいます。涙がとめどもなく流れてとまりませんでした。あたり一面火の海で、全く生きた心地のしない一夜でした。

朝になり、主人が心配なので、家に帰ることにしました。途中、飯倉の通りに来てみると、コンクリート用水桶の中で蒸し焼き状態になり、悲しい姿で亡くなっている方が四人いらっしゃいました。家に帰ってみると、焼け跡には主人の姿は見当たりません。お隣のご主人に伺ったところ、中の橋まで一緒に逃げたということ以外は、はっきりと覚えていませ

んでした。病院でも捜そうと思い、専売局病院の受付けで尋ねてみたところ、主人の名前が袖に縫ってあったおかげで、そこに入院していることが分かりました。中の橋の近所の親切な方が、入院させてくださったのでした。主人は意識不明のまま、ベッドに横たわっていました。枕元には、脳底骨折と書いてありました。隣のベッドでは、油脂焼夷弾で火傷を負った男の人が寝ていました。その人の奥さんが、「主人がお小水をするので手伝ってください」と、頼みにきました。見ると、お尻に赤ん坊の頭くらいの水膨れができています。「イタイ、イタイ」と、うわごとを言いながら、その人は夕方亡くなられました。

二十六日に、また空襲が起きました。先生も、看護婦も、病人も、みんな防空壕へと逃げました。残っているのは私と主人だけでした。死を覚悟し、運を天に任せたのです。私達は助かりました。けれど、主人は、翌二十七日にあの世の人となりました。

三田警察の警官が、検死に来ました。一緒に署まで来るように言われたので、ついていくと、「人に恨まれるようなことはないか」と、聞かれたのです。私はくやしく、「戦争で亡くなったのですよ」と、泣きながら申しました。「仏様は、こちらで大勢一緒に埋葬しますから、家へ帰って準備をしなさい」と、警官が言いました。「お骨は頂けますか」と聞いてみると、「芝区役所へ行って書類を作ってもらい、自分で焼きなさい」と言われました。その夜は、病院の霊安室で亡き主人のお守りをしました。大きな仏様が祭ってあり、亡くなった方、大人三人、子供一人が寝かされていました。私はたった一人で、その中で一夜を過ごしました。恐ろしいとも思いませんでしたが、今考えるとゾーッとします。

朝、隣組の方達が、棺桶を作って持ってきてくださいました。また、妹の主人も、家の棚板をはずして棺桶を造り、リヤカーに乗せて持ってきてくれました。妹の家は、田村町なので焼け残ったのです。二つの棺桶ができましたが、隣組の方のを頂くことにし、それに納棺しました。隣組の方達に手伝っていただき、焼けた木を拾い集めました。妹の主人が持ってきてくれたキカイ油をかけ、空襲中なのでトタン板をかぶせて火をつけました。

翌朝行ってみると、胸だけ肉が付いていて、生焼けでした。胸元に木を乗せ、さらに焼き続け、二日がかりでお骨にしました。けれども、荼毘にはふしたものの、骨壺がありません。何かないかと方々を探すと、ちょうど火消壺が落ちていました。拾い上げ、その中にお骨を納め、三角巾で包みました。いつまでも涙がとまりませんでした。幾日かの夜、菩提寺の和尚様にお経を上げていただき、先祖代々のお墓に埋葬することができました。

本当に、戦争のない今のこの平和こそ大切だと思います。いつまでもいつまでも平和でありますようお祈り申します。

# 艦載機の襲撃を受けた怖さ

◆石上　秀雄（72歳）

向学心に燃えて上京し、学生生活を始めたが、大東亜戦争が勃発したため、国家の非常事態ということで、学生は授業どころか勤労動員と称して、軍事工場へ出動させられるか、農家へ出動して田の草取りや稲刈り、麦刈りなどに従事する毎日であった。

戦況については、最初の頃は破竹の勢いで大本営発表も内容が充実し、意気高揚たるものがあったが、戦争が長期化するにつれて戦果は上がらず発表される内容も歯切れが悪くなった。それにも増して、B29の大編隊襲来の度数が頻繁になり、空襲による被害は日増しに膨大化した。

わたくしたちは、羽田飛行場のすぐ隣りの海軍機のエンジン鍛造（たんぞう）の工場に配属になり、近くの寮に入り、一日八時間の労働、三交代で油と汗とで真黒くなって働いたが、暑いし仕事がきついし、疲労も重なりクタクタの生活を続けた。

日頃空襲といえば、B29の大編隊（八十機から百二十機位）の襲来だから、警報の発令と同時に防空頭布をかぶって防空壕に避難するのが常道だった。ところが、羽田周辺は海岸地帯で標高が低いから、地下を掘ると水が出てくるので、常に三十センチメートル位の水がたまっている。その上天井が低いので、腰を曲げ、膝まで水につかってという防空壕で、とても他地区の防空壕と比べ物にならなかった。したがって、長時間の避難ともなると耐えられなくなるので小さい椅子を持ち込むとか、備えつけるとかの方法を取らざるを得なかった。

ある日のこと、警戒警報にはなっていたが、緊急避難のベルが鳴らないので、普段の作業を続けていると、突然、ドーンという爆発音と地響きがし、工場内は瞬時にして緊張感に包まれた。とたんにキューンという高い金属音がしたかと思ったら、パッパッパッという機関銃の発砲らしい音が、けたたましく工場の上空でしている。とたんに米軍の艦載機の襲来と思った。急降下する艦載機の爆音、機関銃の連続して発砲する音が続く。工場の屋根裏にたまっていた真黒い塵埃（じんあい）が雪のように落ちてくる。作業を続けていた人たちは、みな地面にうつ伏せになり、艦載機の退去を待つ。斜め前方の同僚

が目に写ったが、山と積まれた石炭を崩して隠れようとしているが、次々と崩れて目的が果たせない。その隣の同僚はカマスに上半身を入れて隠れたと思っている。

「頭隠して尻隠さず」という諺があるが、人間の生きざまの正念場には思わず出る動作なのであろう。

そこで「自分は」と思って自分自身を見てみると、なんと建物の九センチメートル位の角の柱に隠れているだけであり、他人のことなど言えたものでない。

すぐ一・五メートル位前の所に防空壕があり、中に入っていた人たちが「早く這ってここに入れ」と大声で怒鳴っている。行こうと思って首を持ち上げるや否や艦載機の急降下音と発砲した機関銃の弾が、すぐ目の前の防空壕の入口のコンクリートの上をツンツンツンと一列に跳ね返っていく。首を縮め、身体を丸めて柱の陰に隠れる。「怖い」の一念だけ、過ぎ去った後は、身体中が汗びっしょりだった。時間にすればどの位だったのだろうか。とても長く感じられた。前に見た「禁じられた遊び」の機上掃射の場面を思い出す。艦載機も退去したので防空壕には入らず立ち上がる。間もなく空襲警報も解除になる。各職場から引き上げて来た同僚の顔は、だれもが汚れた浮浪者のようだった。

作業が終わったら身体が油や汗で汚れているので、必ず入浴してから帰るようになっていた。風呂場に行ってみると窓ガラスというガラスは全部割れて木端(こっぱ)みじんに吹飛んでいる。洗い場も浴槽もガラスの破片が散らばって足の踏み場もない。危険なので下駄履きで入ってよいというので入ったが、こんなこと最初にして最後の経験だろう。

入浴中は怖かった話が次々と出され、戦争の残酷さや悲惨さなどについて議論が百出した。

すぐ近くに五十キロ爆弾が落ちたために、風呂場のガラスが割れたことも、緊急避難を知らせる人が爆風で飛ばされたために合図が遅れたことも理解できた。

寮に帰って残留組に会ったら「今日の艦載機による襲撃は、十数機が入り替り、立ち替り工場の上を急降下しながら機上掃射をしたんだよ」と教えてくれた。われわれも機上掃射を体で感じた者として怖かった話で盛り上がった。でも誰も事故もなく無事だったことで、ホッとする。

こんな体験は二度としたくない。

# 焼野原と家族

◆梅澤　清（73歳）

空襲・被災

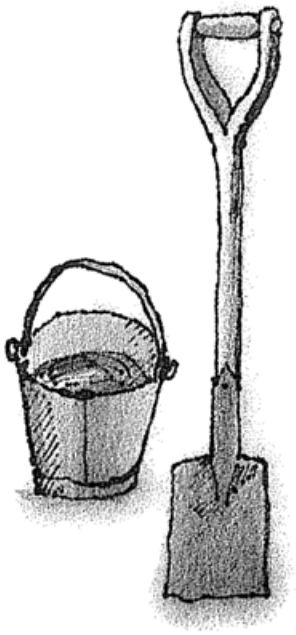
東京にもB29が来るようになった昭和一九年四月、何代か住んでいた入谷町三八〇番地は防災上の理由で強制疎開地域に指定され、隣組の人々と別れることになり記念写真（今でも残っている）をとりそれぞれ縁故を頼りに疎開した。私は龍泉寺（大鷲神社前）の四軒長屋に移転した母と妻が食糧買出しに、私は当時住友電気（日本電気）に徴用で二部制（昼夜）で夜勤の留守の時、ふとんや衣類、柱時計までが一度に盗難にあいました。すぐ前が交番であったので、苦情を言ったことがありました。

三月十日、空襲警報のサイレンで起こされ、またかという感じでした。しばらくすると、もうあっちこっちで四方に火の手があがっており、これは大変と、身支度している中に「ザザー」と焼夷弾（しょういだん）が落ちてきましたので、前の防空壕の中に日常品を押し込んで、どこへ避難しようと三輪通りに出るともう子供の泣き声や兄弟や親を呼びあいとまどう人で行列でした。荷車を引いている人がおり、荷物に火がついているのも知らずに走っているので知らせて、消しとめてもやりました。

隣組で防空訓練でバケツリレーやハタキや長ホーキで消火訓練をしていました。何の役にもたちませんでした。防空ずきんをかぶって身を守るのがやっとで荒川土手まで夢中で逃げつくとようやく下火になったので戻ってみると四方焼野原でした。防空壕も直撃を受け、すっかり燃えて何も残っておりませんでした。「ああ防空壕に残っていなくてよかった」と胸をなでおろしました。

浅草今戸の叔母の安否が気になって行く途中、死体を見ました。どこも焼野原になり、隅田公園に行って探し求めることが出来、涙の対面、お互に無事でした。このときの喜びようは忘れられません。言問橋には足の踏場もないほど子供をかばって死んでいる人たちでした。間もなく憲兵がきて通行止めにしてしまいました。上野駅前稲荷町の一角が焼け残っている話を聞き姉が住んでいたので、叔母とともに厄介になることにしました。姉の家の前をトラックに積んだ死体を上野公園に運ぶのを見ました。

戦争とは家をなくし、家族がばらばらの生活をするなど、悲惨な思いは筆舌にはできるものでありません。こんなことは二度とあってはならないとつくづく思い平和の世の中とする努力はお互いに一人一人の心に思うだけでなく何らかの行動に参加することだと考えています。



## 東京都平和の日条例

平成二年七月二〇日
条例第九〇号

東京都平和の日条例を公布する。

東京都平和の日条例

東京は、今や、世界の経済社会の発展を支える大都市としての地位を占めるに至った。これは、東京の地に住み、働いてきた人々の努力の賜物である。

しかし、東京の歴史には、幾多の惨禍が刻まれている。特に、多数の都民が犠牲となった第二次世界大戦の悲惨を我々は忘れることができない。

平和は、都民すべての願いである。

東京都は、平和国家日本の首都として、世界の都市と連携し、文化交流等の推進に努め、人々の相互理解に立脚した国際秩序の形成と恒久平和の実現に貢献する責務を深く認識し、戦争の惨禍を再び繰り返さないことを誓い、ここに、東京都平和の日を定める。

（平和の日）

第一条　東京都平和の日は、三月十日とする。

（記念行事）

第二条　東京都は、東京都平和の日に、平和の意義を確認し、平和意識の高揚を図るため、記念行事を実施する。

（委任）

第三条　この条例の施行について必要な事項は、規則で定める。

附　則

この条例は、公布の日から施行する。

# 川にとびこんだひと

◇瓜阪　恭博（71歳）

アッツ島が玉砕し、サイパン島が落ち、そのためB29による爆撃が始まった昭和二十年の初め大雪の中で空襲があり、飛行機の爆音のみ大きな音が聞こえ、その中ヒューン、ヒューンという焼夷弾の音がだんだん大きくなりました。雪が降っているためB29がどこを飛んでいるのかわからず、また焼夷弾がどこに落ちるのかもわからず、ただ恐れおののくばかりでした。その中を何はともあれ防空壕へと入り、音が聞こえなくなるのを待つばかりでした。それからは連日のように爆撃があり、数寄屋橋の日本劇場、朝日新聞社、有楽町駅が爆撃され多くの死傷者が出たのはこの頃です。

そして忘れもしません三月九日夜のあの大空襲です。赤坂から見ますと下町の空が真赤になり、その赤さがB29の機体に反射して、B29が赤鬼のように見えました。その夜、乃木坂下を右に入りました奥に乃木坂クラブという木造の三階建の大きな建物がありましたが、赤坂ではここだけ焼夷弾が落ち燃え始めました。我々防護団が手押しポンプを引張り、まわりに延焼しない様、消火しました。隣りが山脇高女の寄宿舎でした為でしょうか、ここに延焼しないよう、一生懸命放水しました。寄宿舎には、まだ女子学生がおりましたが全員避難し、寄宿舎は無事でしたが、乃木坂クラブは全焼しました。

そして、それから三、四日過ぎてからだと思います。朝早く警察より連絡があり、この近辺の男子は、会社に行かず防護団本部に集合ということで三十数名の男が集まりました。どこへ連れていかれるのか分からず信濃町駅まで歩き、そして中央線に乗り錦糸町駅で降ろされ、駅前の江東映画館が本所警察署になっていましたがそこへ立寄り、巡査の誘導で一面焼野原となっている町を歩き、この辺は掘割がたくさんありましたが、それを渡りわりに広い掘割に出ました。今考えると十間川だと思います。下を見ますと原木丸太の筏があり、その上で巡査が鳶口を持ってその丸太の間をかき回すと死体が引掛かりました。それを巡査が針金でしばり、その端を河岸にいる小数の人々が引っ張り上げていました。聞けば十日の朝からずっとこの仕事をしているが、筏の下には、ま

だまだたくさんの人がいるので、我々に手伝いを命ぜられたということでした。始めは死体を引っ張り上げるのを何ともいえない気持ちで作業しておりましたが、その中に母親が子供を背負い両手に二人の子供の手をぎゅっと握りしめたままの四人の遺体が引掛かりました。どれも子供は小さなリュックを背負っておりました。これを見ました時何とも痛ましく涙が出ました。みんなは思わず筏の上に飛下り、素手で河岸に引き上げました。四十数年経た今でもこの光景は忘れることは出来ません。

これらの方はこちらから焼け出され、逃げる中、また火に当り戻って来たものの、火のため戻れず、掘割の下を見ると筏があったので、そこへ降りたのだそうです。しかし筏を見ますと半面焼けた所もあります。恐らく筏にも火がついたのでしょう。こうなると筏を結んであった縄も焼けました。そのため原木丸太ですのでくるりと回り水の中に落ち、その筏の下で溺死したそうです。なるほど遺体はどこも焼けていませんでした。全く悲惨なものでした。現場に着いたのが、午後一時で、三時に引き上げることになっていましたが、その間に三十数体引き上げました。

引き上げた遺体は道路に並べ巡査が身元を手帳に記していました。当時は胸に住所氏名を記したキレを張っていましたので、それを書き取っていました。また、お年寄りは腰に風呂敷を巻いていましたが、それをあけるとみんな位牌が入っていました。巡査がそれを取り出し頭の方に飾っていました。恐らくお年寄りは位牌だけを大事に持って逃げたのだと思います。誠にあわれでした。

検視が終りますと平トラックの上に遺体を積み上げ、焼トタンで見えないようにカバーしてどこかへ運んで行きました。後日近くの公園の傍らを通りました時、恐らく埋葬も出来なかったのでしょう。土の上に遺体を置き、その上に土をかけて山盛りになったのがたくさん並んでいました。戦争に全く関係のない老人や幼児のこの悲惨な光景を見て戦争の非情さを感じたものです。赤坂に戻ってそのうち赤坂も焼かれることは免れないと思い、家族にはこの悲惨な目に合わせないようにと家族のみ疎開させました。

お陰で現在、一同無事でいられる事を感謝し、再びこのような事が起きないよう、願わずにはいられません。

# 生涯三度の火災

## ―瞼に焼きついた空襲の火―

◇岡野　君香（70歳）

仙台坂の下の方に東町食堂と言う大きな大衆食堂がありました。戦争がながくなり物資が不足して雑炊食堂になりました。湯の中に米つぶが浮いていて人参の葉の入ったもの、味なんてありません。大きなお釜から流し箱に移す時、土方仕事に使うようなスコップで移すの見たら、食欲も減り気味ですが、空襲にでもならない内に食べておかなければ、また、この戦争に勝つという信念を支えに長い行列をして鍋等をかかえて買うのです。

それは五月二十四日の夜、何時頃か忘れましたけど、かけっぱなしのラジオからいきなり空襲警報が発令され、キーと言う音で縁側の雨戸を明けると東町食堂や松本歯医者東町三六番地に焼夷弾が落ちて火の海です「こりゃ早く逃げなきゃ」父の声で私姉父と三人私は帯でつくったリュックをしょって長屋の奥から通りに出るともう人の波B29から落す焼夷弾は親子焼夷弾と言って大きなのから十個くらいずつ落ちて来ます。電気花火と言うのをあげてるみたいに青白くいつの間にか父も姉も見えません。「岡野さんいっしょに逃げよう」の声に見ると筋向の木暮さんです。おばさんはあわてたので足駄をはいてます。私の持ってた駒下駄にはきかえて道路に置いてあるコンクリートの水そうの水を防空頭巾の上からかけて逃げますが、火の海の中をよけて行くので、すぐ乾いて何度も水をかけました。小母さんは夜警をしてるおじさんを心配してましたが、私のそばからはなれてしまいました。私ははずみで落ちてた焼夷弾に一度手をふれたら火傷をし、ヒリヒリするのを我慢しながら三月十日の大空襲で焼野原になった十番に来てしまい、空いてる防空壕にはいってるうちにB29も去り、夜明けになって雑式通りをぬけると、父と姉に会いました。青山墓地に逃げたがここもひどかったとの事、どの人も皆すすけてうす黒くなっています。

自分達の住んでる所に見に行きましたが、ひどいものです。古川橋病院や朝日新聞社の救急隊のトラックが来たので手を見せて赤チンをつけてもらいましたが、当時は赤チンくらいしかありません。東町小学校の焼残りの所に休んでると学校の近くで機械工場を経営してる上村さんとおっしゃる方

の物置が焼け残ったとかでそこに参りますと三六番地の平野さんもいて上村さんご夫婦と息子さん、おじょうさん、甥ごさん他に四家族くらい住んでいて、焼けあとからひろって来た鍋釜で暮らし始めました。米の配給なんかほとんど無しで配給大豆をゆでて焼け残りの木の枝をすりこぎにして平野さんが田舎から持って来た味噌をいれ、呉汁にして毎日のように食べました。何日か立って昼間横浜の大空襲はすごかったらしく、そこの上村さんの所から白煙がもうもうとして、それから少したって終戦になりました。

上村さんの家族は良い方でとてもお世話になりました。これからは、ぐっすりと眠れると思うとホッとしました。父の知人が焼けなかったので焼け残りの家の二階に間借りをしましたが、銭湯は混んで、着ている物を皆、盗まれたり、働く所もなく、大変でした。焼夷弾でやけどをした左手は、当時より二年くらいはくらい所に手をかざすと赤くなり、冬は、そのところが荒れてしまいました。焼夷弾でこうだから、原爆は、こわいわけです。

今はチビッ子達のはしゃぐ声を聞くと、ああ平和だなあと思います。何しろ子供のすがたなんて見ませんでしたから。私事ですが、私は関東大震災、五月の大空襲。終戦になって四十八年、もらい火の火事で焼け、計三回も火災に会いました。もらい火の火事は仕方ないとして、あの空襲での火の海は強く瞼に残っています。

四回目の火はあの世に出かける時の火です。

雑炊食堂　昭和19年５月

# 真夏の悪夢

◆小川　勇（68歳）

名古屋城炎上

昭和二十年の夏、終戦を直前にして名古屋はまたまたB29の大空襲を受けた。真昼のことである。

当時私は、東海軍司令部付の見習士官として名古屋城の真下の兵舎にいた。たまたま当日は非番であったので宿舎で休養していたのだが、空襲警報のサイレンと共に、B29の大編隊が名古屋上空に飛来した。

私は、とるものもとりあえず、近くの防空壕に避難した。

やがて爆音と共にあたりに焼夷弾らしきものの落下する音が、うなりを立ててきたと思いきや今度は耳をつんざく炸裂音が防空壕をゆさぶった。「もうこれまでか」と観念して目を閉じた。すごい地響きが防空壕の低い天井をゆるがし、土砂が頭の上から落ちてきた。その瞬間頭の中を横切ったのは、なんと、母親の顔だった。「さようなら」と遠い船橋のわが家にいるはずの母親に言ったような気がする。相変わらずヒュルヒュール、どかんどかん、パチパチと言う無気味な音が響く。

数十分たったであろうか、やがて、あたりの爆裂音が静まり、何やら叫ぶ人の声が耳に入ってきた。空襲が終わったのかもしれない。一所に入っていた何人かの兵士たちが、防空壕から出ていく気配だ。私も、その後から壕を出た。出て驚いたことに、私の待避していた防空壕に焼夷弾が五、六本突き刺さっているではないか。つまり不発のままでいるのだ。これがもし、焼夷弾でなく爆弾であったならば、木端微塵あとかたもなく消え失せていたであろうと思うとぞっとした。

火の粉が飛び散るあたりを見回すと、兵舎という兵舎は黒い煙と共に紅蓮の炎が逆巻いていた。この世の終わりかと思うすさまじさだ。

目を転じて名古屋城を見ると、城は、火柱を立て、天に向かってごうごうと燃え上がっていた。城が燃え上がるそのすさまじさは、筆舌には尽しがたい。天守閣は、ちょうど筒状になっているのだから、炎は、どうっと勢いよく立ちのぼるわけである。しかも、高台にあって偉容を誇っているだけに、城が炎上する姿は、実にすごいのだ。

みるみるうちに、炎は、天にも届けとばかりに燃え盛り、あっと思った途端、今度は、ぐわあっと、天守閣の屋根が落下した。その瞬間、火の粉が大きく飛び散ったのである。壮観と言ったのでは、あまりにもみじめであろうが、しかしやはり壮観だったのである。そして、城が焼け落ちるその瞬間の光景は、見事に美しいのである。四十五年前のできごとだが、今でも鮮明に瞼の底に焼きついているのだ。城が焼け落ちるというその壮絶さもその哀れさも、この眼で見た者でないと実感できないであろう。そして、城が落ちれば、それはやがて戦いに敗れることになる。何かしらそのような予感が走った後の八月十五日、日本はついに無条件降服という敗戦の日を迎えたのである。

名古屋城が炎上落下したその日の午後、幸い焼け残った兵舎の一部に私の個室があった。その窓から見るともなしに前方を見ると、私と同じ見習士官が右方向から左方向へ歩いて行く姿が目に入った。

その見習士官が、何気なく転がっている焼夷弾の破片のようなものを足でちょいと蹴ったのである。ぶあっと、鈍い音を立てたと思うと、その見習士官の股間から血がどっと溢れた。そして、彼は、二、三歩進んだと見るとその場に崩れるように倒れてしまったのである。「あっ」と私は思わず声を出してしまったのだが、すぐに誰かがとんできて、その見習士官を助け起こして連れ去っていった。

その見習士官は、まもなく死んだということを耳にした。なんということだ。あの大空襲からやっと生き残った見習士官がふと焼夷弾頭を足蹴りにしたばっかりにあたら命をおとしてしまったのである。焼夷弾頭には、炸裂する仕掛けがなされていたのである。もし、私が、そのあたりを歩いていたのならば、同じようなことをやったかもしれない。焼夷弾頭には風車のようなものがついているので、ちょっとさわってみたくなるように仕組まれているのだった。真夏の悪夢のようだった。

戦争は、人の命を奪うこの世で一番恐ろしい所業である。しかも、その戦争をたくらみ戦争を仕掛けるのも人間なのだから、一体、人間という生きものは何なのであろうか。

戦争体験者の一人として、いくつかのむごい情況に遭遇し、そして、今を生きていながら、ふと、その恐ろしさを忘れかけてしまいそうになる。今回の記録は、その私たちに有力な警鐘となるであろう。

◆恩田耕一郎（67歳）

# 戦争への怒りを感じながら

空襲・被災●

戦争を知らない子供達という歌がある。日本ではすでに、戦後生れの人が多いだけに、戦争の体験者は、ますます貴重品となってきた。

それだけに、惨状を極めた当時のことを記録し、語りつぐことは、戦乱をくぐりぬけてきた者の、責務とさえ感じる。

私も妻も、昭和二十年の春まだ浅い、三月九日から十日にかけての、下町大空襲で被爆した。場所は浅草線が京成電車と接続する昔の本所、今の墨田区の押上である。

あの夜、三百機をこす巨大なB29爆撃機は、初め上空から次第と低空に、機体が手にとるように見え、轟音をたてて飛来した。

投下の大型爆弾は、地上近くなると炸裂して、小型の数十の油脂焼夷弾がバラバラと落下してきた。

火災は天をこがし錦糸町・吾妻橋方面から押上に迫ってきた。私の家は電車通りで、家の前をリヤカーや風呂敷包みを背負い、足ばやに、柳島・亀戸方面に逃げる人々の列が続いた。突然数頭の裸馬が、その人の列を蹴ちらかすように、走り去ったのを覚えている。

町内の人達は電車通りと十間川の間が、強制疎開で帯状になっていた空地に、家財道具を運んだ。この強制疎開は空襲の時に、延焼の防止策で軍の命令で行われ、否応なしに家屋は取り壊された。その場所には、仕立洋服店、呉服店、小間物屋、そして松の湯という銭湯もあった地域である。

現在なら、都市計画道路の拡幅なら、当然土地・建物・営業など補償されるが、戦争遂行上で、全くの強制撤去であった。

この夜の火炎と熱風はすさまじく、広場に置いた家財道具が、次々と燃え始め烈風に煽られ、ちょうど地面に、赤いすだれが出来たように、地上にある一切の物を炎はなめつくした。

この火炎から身を守るには、ただ一個所、十間川の水に入る以外になくなり、火災と強風で赤く波打つ川に、人々は次々と入り両側の岸にへばりつき、落ちる火の粉を払った。

私の家族は、父と母、弟と妹二人で、それに宮内庁消防官

の森さんは勤務中で、奥さんが小さい娘二人を連れて来たので、助け合い護岸に身をよせた。水位は子供の首がつかるほどあり、大人が膝の上に乗せるように支えた。そんな時、ちょうど、川の中央を敷蒲団を重ねた、その四方がすでに燃えさかる中で、赤ちゃんが、それこそ火のつくように泣きながら、柳島の方に流されて行くのを見ても、どうすることもできなかった。

そのうち森さんの娘二人が、顔を下げ口からあわを出し、様子がおかしいので、私は妹を父に頼み、二人の子の尻を持って必死で押し上げたが、次第と意識を失っていった。夜が白む頃、両岸で呼応するように、海ゆかばの歌が合唱されたりした。朝になると胸までの水位は、腰のあたりまで干潮で下った。

防空壕で助かった放送局に勤めていた宮坂さんが、ゴムホースで私達を川から次々と、引き揚げてくれた。

しかし、私のすぐ下の妹は仮死状態で、弟とあわてて、冷え切った体を温めるため、焼トタンの上に寝かせ、また熱い焼土を全身にくり返しかけ、ワーと泣き出して一命をとり止めることができた。河岸に立つと、一面の焼野ガ原で、十三間通りのイチヂク浣腸のビルと、柳島の変電所そして柳元小学校しか残っていなかった。

生存者は、次々と学校に集まって収容されて私達も二日ほど休養して相談の結果、千葉市にいる父の妹宅に行くことで学校を出た。学校から一歩出て驚くのは、道路の両側に死体が重なり、子供を下に抱くようにした、黒こげの母親の姿、防火水槽につかった何人もの死体も見た。特に私達が助かった十間川には無数の水死体が浮かんでいた。

一家は、荒川・四ツ木に向い死体の放置されている道を歩いた。そのとき私の前を歩く妹は、四月に小学校入学だったので、買ってもらったランドセルだけはしっかり肩にしていたが、少さなモンペの右足は長靴で、左足には運動靴、とぼとぼと前かがみで歩いていた。

私はその時初めて、腹の底から怒りがこみ上げてきた。死んだ森さんの可愛がっていた幼い二人の子供、燃えさかる蒲団で泣き叫んでいた赤ちゃん、そして一年生入学を楽しみにしていた妹、これらの幼い子供達を、何故こんなひどい目にあわせたのだ。誰が一体この生地獄となった、戦争を起したのか。私は、こみあげる怒りにふるえ、膝をついて焼跡の土を叩き、とめどもなく涙を流した。

# 語りきれない戦争中の一コマ

◆恩田淘子（64歳）

空襲・被災●

昭和二十年八月十五日、私は山梨県の日下部のある農協で終戦を知りました。雲一つない青空とラジオの放送を無感動な乾いた気持で聞いた事を今も覚えています。帰路、夕陽が山襞を深いワインと濃紫に染めわけた富士を迎ぎみた時、涙が溢れてきました。三月十日、身体まで焼いて丸裸で千葉、山梨と僅な縁をたよりに疎開した娘は、鬼畜と言われる米兵の上陸でどうなるのか、どうしていいかわかりませんでした。

昭和十二年、七月七日、蘆溝橋での銃声が中国と全面的戦闘となり、矢つぎばやの、南京、武漢三鎮の占領と、昼は旗、夜は提灯と行列に浮かれたのもわずか、勝利の戦果の大本営発表に反し、日毎に兵隊さんの無言の帰還や、食糧不足、インフレの中で十八年の十二月からは徴兵令も十九歳になりました。

昭和十九年七月には、勝ってる筈の日本軍がサイパンで全滅し、米軍の基地となってからは、日本の主要都市への空襲が日を追い激しく焦土化がすすみました。当時航空エンジンの三割を製産してた三鷹の中島飛行機も、数回の爆弾攻撃で二百名近い死者と、五百名をこえる負傷者を出して廃墟と化していた事など知るよしもありませんでした。

昭和二十年二月二十五日、大雪、数回もくりかえす波状攻撃も我が軍は迎えうつ力もないのか、雨のように投下される、黄燐、油脂焼夷弾を隣組老いも若きも全員で消し止めて、その夜は水びたしの家を後に、近くの小学校へ避難の途中、雪のつもった壕の中に落ちこんで寒さと、疲労で眠ってしまうところでした。どうして助かったか、もう思い出せません。「家が焼ける時は死ぬときさ」と言ってた強がりを引っこめて、あわただしく大八車で運んだ疎開の品は駅でその晩のうちに焼けてしまいました。

そして三月九日の晩です。群がるB29は、下町一帯まわりからガソリンをまいてから、焼夷弾を投下したといわれる程の業火で、低空の敵機がはっきり夜空に浮び、火が風を呼び、直径五十糎もあろうか、火の玉が吹きぶりの雨より激しく横なぐりに飛びかって、熱風で乾ききった家も電柱も瞬時

にもえて、大きな火のうねりは、家も人も次々にのみこんでいきます。母、弟、私三人の待避してた壕の入口の鉄の戸が、突然吹き上げられて、なぐりこむように火の玉が壕内をおそいます。壕の支柱についてすぐ燃え出しました。

「母さんあぶない、出よう」

「出たら死んじゃうよ」とあわただしく母の声を背中できいて、私は夢中でとび出しました。火の玉がオーバーや防空頭布について燃え出し、夢中で火の中に手を入れてもみ消し、力のない幼子が風で横倒しのままクルクル風車のように飛ばされると、瞬時に衣類がもえてからだだけが白く飛んでいきます。私ももう駄目だと覚悟した時、僅(わず)か数秒の間にすぎし日々の想いが走馬燈のようにめぐり、ああ、ここでは絶対死ねないと活路をもとめる気持ちが、水浸しの防空壕のあった事を思い出しました。私は夢中でその壕にたどりついた頃、「母さんを助けて、僕、孝行します」と言う弟を「母さんと死んでくれ」と抱きかかえた母は、現金のまま大金を背負った風呂敷包に気づき、私が死んだら残された子供が生きていけないと、そばにあった二人だけ入れる小さい壕の中で水をかぶり、火傷(やけど)だらけになったけれど生きのびました。一晩に十万の人々が焼死した惨状はとても表現出来ません。

我が家に泊っていた四人のお客も皆、死にました。疎開先から三歳の坊やをつれてその晩泊まった吉田さんも母子離れ離れで、白い蠟人形のような姿に、茨城から地下たびで歩いてきた身内に、「やすよ、なんという姿になったんだ」と声をかけられて、口から一すじの血を流しました。無念だったのでしょう。いつまでもその姿が忘れられませんでした。私達が飛び出した壕は無惨にも屋根が落ちて、壕内の三十人近い人々が肩まで、泥と水につかって死んでいました。皆同じように顔を上にむけて苦しそうでした。そんな壕が押上駅から綿糸町駅までの広い通りにいく列もならんでました。そうした犠牲者は、動員された警防団さんが車に手かぎで米俵でも積むように公園にはこび、たがい違いに幾重にも重ねられて埋葬されました。

戦後、四十五年、二組の娘夫婦と四人の孫家族全員の幸が人一倍ほしい年になりました。先日長い間念願だった広島で、平和の鐘を、万感の想いでついてきました。今日も地球上のどこかで、個人的にはなんの理由もなく憎しみをかり立てられて戦ってる人達を思う時、蘆溝橋も、真珠湾も後へ戻れぬ時まで何も知らされず突入した私達の歴史を、今日ほど、しっかり受け止めなければならぬと思います。そんな想いで、語りきれぬ戦争中の一こまを、思うように表現しきれぬもどかしさのまま、読んでいただこうと書きました。

# 東京空襲と私の体験

◇菅野　太内（60歳）

港区が米軍機により被害を受けたのは、昭和十九年の秋九月頃が最初だったと思います。当時私は中学二年生で、芝区新堀町から麹町の学校に通っており、当日は学校の畑があった久我山へサツマイモを掘りに行って、帰途渋谷で空襲警報となり、路地裏にかくれて昼食の大豆を煎って醤油をまぶしたのをポケットから出してポリポリかみながら上空を見ると、米軍機一機が飛んでゆくのが見えました。あくる日都電で昨日掘ったイモを持って学校にゆく途中、飯倉の今の料亭赤羽のあたりでしょうか、焼け跡に兵隊さんが板塀を張り巡らして居り、外側を憲兵が見張っていました。その頃は中学生でも敗色濃いことが判っていましたから、空襲の被害状況は一般の人にも実体を知らせたほうが良いのでは、と思ったものです。

この頃になると、食料事情はますます悪くなり、お米の代りに大豆や豆かす（油をしぼった残り）が多くなり、町には雑炊食堂というのがありましたが、いろいろな魚をくだいて煮込んだものにつなぎにうどん粉でも入れたようなもので米粒は入っていなかったと思います。みな一家総出で鍋を持って並び、すぐ売り切れてしまうので、買うのも大変でした。野菜も少なく、鉢や木の箱を使い、小松菜などを植えて若干でも足しにしたものです。学校では蚕のさなぎの粉をふりかけとして支給されたこともありました。

その後、B29が大挙飛来するようになると、東京の夜空はあちこちがまっ赤にそまり、国民学校の学童集団疎開が始まったと思います。私の所では、母が六年の妹と一年の弟をつれて福島県の実家に行っていましたが、東京はもう危ないというので至急連絡をとり、置いて帰って来ましたが、弟は悲しがって泣き、つらかったと帰宅して話しました。それで妹弟は縁故疎開ということになりました。これ以前に古川の両岸は延焼防止のため、強制取りこわしが行われています。

昭和二十年の正月はどんなものを食べて祝ったか覚えていません。空襲ははげしくなる一方で、夜は服を着たまま、カバンには学用品全部をつめ込み枕元に置いて寝たものですが、町の人達は「新堀町は大正の大震災にも焼け残ったんだ

から今度も大丈夫」等話し合っていました。芝公園の丘の下には横穴壕がいくつか掘られ、各家庭にはたこ壺、ちょっとした空地には浅く掘った壕に木材を渡して土をかぶせたものも作りました。

ある晩、警報により、家の壕に母と入っていると、遠くからヒューという音が聞こえ、だんだん大きくなり近づいて来るのがわかり、最後はゴーという大きな音になりました。私が「もう駄目かな?」と一人言をいったら、母が「そんなこわいことといわないで」といった瞬間轟音と共に家がゆれガラスが割れました。これで助かったと安心出来ました。爆弾は金杉橋近辺に落ち、川岸の空地には直径七~八メートルのすり鉢状の穴があいており、これなら相当近くに落ちても助かるかな?と思いました。ですから米軍も都市攻撃にはほとんど爆弾を用いず焼夷弾による絨毯爆撃により東京を焼きつくしたのでしょう。

この間、十番が焼けたのは四月八日です。五月も末に近くなって、二十三日から二十四日にかけ新堀町にも焼夷弾の雨が降りそそぎ、西から今の芝二~一七あたりまで焼けて来ました。男手が少なかったので私は平家の屋根に昇り、奥さん方のバケツリレーで運ばれる水を必死で焼け落ちる境へかけ延焼を防ぎました。朝方近くなり疲れから屋根をふみはずしまっすぐ下へ落ち、母が「危ないからもう昇るな」というのもかまわず、どこも痛くなかったのですぐかけ昇ってとうとう延焼を食い止めました。

一夜明け二十五日又も空襲です。この頃は爆弾は落ちないので壕には入りません。隣組長の命令で前回焼けた跡がくすぶっているので完全消火するよういわれ、バケツを持ち出掛けました。するとまた焼夷弾の雨と低空からの銃弾の音がヒューヒューして、身近にも落ちて来たので思わず地に伏せました。すぐ我が家の方に火の手が上り、どんどん人が逃げて来ます。これはもう家に戻っても危ないと思い日比谷通りへ出ると、増上寺の五重の塔が下からもえ上がっていてとてもきれいに見え、四国町も全滅寸前でした。

私は反射的に今の長谷工から東京港口へのがれました。夜が明け焼跡で父母と会い無事を喜びました。この時の新堀町の焼死者は通りのわきに七~八体並べられていて、その中の一体は若い奥さんで、窒息死のため顔、衣類そのまま、まるで生きているようで、そばにご主人と男の子が呆然と立ちつくしていた姿は今も忘れられません。隣の釣具店のご主人は焼夷弾の直撃を足にうけ病院へ運びましたが亡くなり、その夜は竹芝小に泊まりました。亡くなられた方々に心から哀悼の意を表し、この大きな犠牲を無にせず平和を守りたいと思います。

# 残された我が命

◇北村　守（71歳）

昭和二十年五月二十四日未明、私は防護隊の一員としてB29の来襲に備え、日本電気芝浦工場の屋上に立っていた。午前二時頃海岸方向より飛来、焼夷弾攻撃がはじまった。やがて田町駅に隣接する「東京高等工芸学校」の校舎に火の手が上った。ここは私の母校、思い出の校舎が激しい焔（ほのお）の中に崩れ落ちる。

もうもうと立上る火煙で鉄道線路より西側の様子はよく見えない。

当時私は渋谷区原宿二丁目に住んでいた。その夜は、八十八歳の祖父、七十五歳の祖母と二十三歳の妻が自宅に残っていた。我が家がどうなっているか気になるが……。

幸い工場付近には被害がなく、早朝勤務を終えて帰路につく。鉄道は不通であるので徒歩で、新橋―溜池―赤坂見付―青山一丁目―青山四丁目を通って帰ることにした。沿道はすっかり焼跡の原が続く。もしや自分の家だけは残っているのではないかという一縷（る）の望みは、すっかり消えた。青山四丁目から右へ折れて原宿通りを過ぎたが人影は無い。家族はどこへ避難したのだろうか。町内の計画では代々木練兵場の南隅の北谷稲荷境内が集結場所とされていたので、ひとまず行って見ることにした。我が家から優に三十分はかかる。

着いてみたが誰もいない。もしかしたら明治神宮外苑広場かもしれないと思い、表参道から東郷神社方向へ歩く。神社と改正道路をはさんだ反対側へ渡る。そこの空地で見たのは、数十体の黒コゲの遺体。警防団の人々が近所の道路に横たわる遺体の収容をはじめていた。もしかしたらこの中に入っているのではないかと瞬間頭に浮かんだが、なんとしても自分の目で探さなくてはと急ぎ足で、玉屋工場の前から熊野神社へと向う。三人家族がバラバラではとても全員そろって発見することは不可能だ。死体の収容はすぐそばまで来ている。早くせねばと気ばかりせく。やがて神社のすぐ手前まで来た。多くの遺体が道路上に倒れ、うずくまっている。と見ると、三体が一ケ所にかたまっているのが見える。あっと目をこらす。見おぼえのある着衣の一片。間違いない我が家族全員の遺体だ。黒コゲのかたまり。しばしあぜんとなる。し

かし何たる導きか。家族が私の発見を待ちに待っていたに違いない。もう一歩おそかったら……。

やがて気をとり直して近所の焼け跡から鉄のフレームだけのリヤカーを借用。三人を積み重ねて我が家の焼跡まで運ぶ。数時間前までは、元気で語り合っていただろうに、変わり果てた姿で我が家跡に到着。近所の人の話では、「北村さんのお宅では病身のおばあさんをかかえているので早目に避難された。若いお嫁さんが老人二人の手をとって外苑方向に向かわれたが、最後まで三人揃っていたとは……。自分一人なら無事に逃げられたであろうに。健気なお嫁さんだったですね」

この話を聞いて今まで涙も出ずに夢中で行動していた私は、止めどなく感謝の涙が流れ落ちた。

焼けトタンの上に三体の遺体を列べ、だびに付することにした。焼け残りの木片を集め火をつけるがなかなか思うようには焼けない。

折から一人のお坊さんが通りかかり、心から野辺の送りのお経をあげて下さった。近所のお寺の関係の方ではないかと、今でも心に残っている。

不十分ながらも一生懸命に家族の遺体を自分の手で焼いた。私が五歳の時から手塩にかけてくれた祖父、祖母、それと最後まで老人二人と死まで共にしてくれた妻。この三人に対して私が出来た最後の恩返しがこのだびであった。

走馬燈のように今日一日が頭を回る。やがて満天の星が空に輝く。家族、財産すべてを失い、残るは一つ我がいのちのみ。召集免除を解除してもらい再び軍服を着てお国のために死のうと心に決めた。

麻布桜田街にて

（港区立南山小学校元教諭　恩田孝徳画）

◆小宮　りよ（81歳）

# 背中の火と赤ん坊

空襲・被災

昭和二十年三月十日あるいは九日午前八時ごろ、空襲が始まった。深川平井町二丁目に住んでいた私たち家族は娘二人と男児二人、生まれて四十二日目の三男の七人でした。その時夫は隣組の見回りに行っていたけど、「もうここもあぶないから早く逃げる用意をしとけ」と言って、また見まわりに行きました。その後で娘達は、弟二人と近くの町内で用意した大防空壕に入り、私はずっと遅れて行ったのでもういっぱいで、隣の嫁姑さんと一番出口にやっと入れたのです。でも、十分もたたないうちに、幼稚園の屋根が燃え出したので、一番始めに逃げることが出来たのです。早く入った子供たちは夫が大きな声で呼んだらすぐに見つかって、五人で一緒に逃げることができましたが、一番奥に入った人は何人か犠牲になったそうです。

私は、まだ首もすわらない三男を窒息させないように工夫して、三十メートルの風と両側から燃える火に追われて、汽車会社の材木置場へ逃げたのですが、そこまで行くのに両側から降り注ぐ火の粉で歩けず、途中防空壕に二度も入り、中にいる人にそのたび、子供の鼻をつぶしていないか、息をしているかと聞き、時を見ては、せおい直して注意して、ようやく橋のたもとまで来た時、隣りの嫁姑さんと一緒になり、ここでもう一緒に死のうと言ったけれどその時、両側の家がいっしょにものすごい勢いで燃え始めたので、思わず橋を渡って逃げたのですが、その時、私の着ていた綿入りのどてらが燃え出し、教えてくれた人に後ろから引張ってもらい何枚も重ねて着ていたのでそれを捨て、先を急ぎました。その時別れた半身不随のお二人も無事その時は助かったそうですが、御主人とおじいさんは犠牲になったそうです。

私の逃げた所の川の向こうが洲崎の遊廓で川には、いかだがいくつかありました。いかだの上で「助けてくれ」とさけんでいた人達も一人倒れ二人倒れて一人の呼ぶ声もなくなりました。その内私の背中にまた火が付いたので、このままで焼け死んではならぬと子供を腹に晒しの帯でしっかり抱いて頭から水をかぶっていました。ちょっと手を休めるとすぐ乾き燃え始めるので休みなしに体を動かしていたため凍らずに

すんだようです。所々に積んであった角材に火が付き、ぼうぼうと燃え出し、その一本が私の横腹に当り息が付けなくなりました。もうだめだと思いましたが、今度はいた所の草がやけ始めたのです。私の周りには十人位の人が避難していたので、私は思わず大声で周りの草をむしって川へ投げないと体に火が付くよと叫びました。

そしてやがて気の付いた時には子供は息がなかったのです。それからしばらくして爆撃もおさまり、飛行機もいなくなり一尺五寸くらいの所をはい上がろうとしても力尽きて上がれないので、たった一組残っていた男女に手を引張ってくれと頼みましたがそのまま行ってしまったので私は力を振りしぼって、やっとはい上り地上に出たけど十人ほどいた所だけきれいに草がなくなっていました。皆が一生懸命草をむしって川に捨てたんだと思いました。そして何枚も着ていた物を脱いで、まだ燃えている火で乾かし、自分の家を見て行こうとしたら、一人のおじさんに会って聞くと「平井町の方は焼け野原だから早く親戚でもどこでも逃げないと又飛行機が来るよ」と言われたので、あきらめて早く千葉の生家へ行こうと歩き出しました。四方八方死人があったけど生焼けの人はほとんどなく、ちょうどこんがりと赤茶色の大きな燻製を見るようでちっとも気持ち悪いと感じませんでした。私は、火と灰で目が三日間見えなかったけど、荷馬車や自転車につかまらしてもらいようやく市川から電車に乗せてもらい、リヤカーで迎えに来ていた母と弟に千葉駅から寒川の家へ帰ったのです。

母はもう死んだものと思っていたそうです。家では母のかかり付けのお医者が待っていてくれて手当てを受けました。私の背中に火が付いた時、先を歩いていた人の毛布がどんどん燃えていたけど私もあの時、後ろから着衣を引っ張ってくれる人がいなかったら、今頃は私も赤ん坊も丸焼きになったことでしょう。私が川に入り火の粉と戦っていた時、川の中から男の人が私の足をつかんで、「助けてくれ、上げてくれ」と言ったけど私は声をはり上げて「私は赤ん坊を抱いていて手がかせない。男でしょう、しっかりして自分で上がんなさい」と、どなりつけました。すると、男はつかんでいた手を放すと流れて行ったようですが、あの人はあのまま川の中で凍えて死んだかも知れないと後々まで心に残りました。死んだ子供は覚えていたとおり「小川製作所」の看板のかかっていた門の所にそのままになっていたので夫と弟で、お骨にして持ち帰りました。

# 戦火の夜の思い出

◇小宮山喜久（83歳）

昭和二十年五月二十五日の真夜中二時頃、空襲警報発令と同時に、防空壕に入る間もあらばこそ、B29がすさまじい爆音をたてて低空でわが町（三田四國町）に焼夷弾を雨あられと降らせた。

私と並んで立っていた裏のKさんが悲鳴をあげて倒れた。瞬時の出来事！腿に焼夷弾が突きささったのだ。その焼夷弾の束を消そうと、近所の人々は怪我人の身体の上をバケツを持って、乗り越え水をかける作業を続ける。

そんな事で火が消えるのか？無茶苦茶な話だ。これは大変、怪我人を一時も早く病院に運ばねば。（ちょうど私方は商売を一時休業して町会事務所に貸していたので、）救命道具万端そろっていた。担架も三台立てかけてあった。

それをもってきて怪我人を乗せる。腿がザクロのように裂けて血が噴き出している。

自分の防空袋から手拭を何本も取り出して怪我人の足のつけねを固く縛り、呆然と立ちすくんでいるKさんのご主人に、さ、病院に行きましょうと私はうしろを担ぐ。まわりには、町会長の奥様や大勢ワイワイといた。皆に呼びかけて「時々代って頂けませんか？」と叫んだが、今自分の家が焼けるかも知れないのに人事ではないと皆ソッポをむいた。しかたがない、例え小さい医院でも応急手当をして貰わねばと、うしろを担ぐ。「お母さん！無理よ、やめて」と燃えさかるこの我々の家の間から、闇をついて嫁が叫ぶ。今、我が家が焼けるかも知れない。けれど、こうしなければこの怪我人は死んでしまう。人命は尊い、何としても救わねば。Kさん三十三歳。医院、病院と近くから片ッ端に探して何軒歩いたか？どこも何の答えもなく静まりかえっている。私方近所はきっと焼夷弾の束を消すのでみんなおおわらわなのだろう。なるべく焼けてない所をさまよい歩く。三五キロの私は人の重みに何度か担架の棒を落としそうになった。担架の棒をしっかり握って、火の海を右往左往する人をかきわけやっと大きい個人病院（鈴木胃腸病院）の前に出る。大声で怪我人診て下さい！と叫んだがまっくらで物音一つしない。何としても手当を受けねばと病院の玄関で夜空をこがす戦火を見

た。

ケガ人に、細い声で「傍にいてね」と呻き泣きつつ迫られると身を切られる思いである。

五月の末ながら夜風は身にしみて、ふとん一つ怪我人にかけないでさぞや傷口が辛いだろうと思ってあわてて自分の防空頭巾を、傷口にかけてあげる。誰もいない病院の前にいつまで休んでもいられない。また担架をかつぐ。紅蓮の炎を間近に、阿修羅のように逃げる人々で担架は進まない。娘は、家はと考えると胸がつまる思い。田町駅への近道をぬけて、夜が白みかけた頃、札の辻陸橋の上に出る。避難する人で橋の上は埋めつくされている

むこう側（三田寄りの方は）ボンボンと燃えている。それを兵隊がポンプで消火に大わらわ。

止血剤、強心剤打ってと、衛生兵を見つけて声を涸らして叫ぶ。必死に頼む。

夜中の二時頃から三時間たっての事、可哀相に、どうする事も出来なかったのだ。

慶應義塾側は軒並焼けて、反対側の道路も熱気で歩けず、裏通り（御地蔵様のある所）を三井集会所の長いクリーム色の塀に添って大まわりして三田警察署の前を済生会病院へやっと着いた。けれどこの病院の廊下にあふれる怪我人数知れず。いつ順番がまわってくるかわからない。呻き苦しむこの世の地獄を目のあたり見た。看護婦はこれが限度、この病院もいつ上から焼けるかわからず、中の橋の専売病院に行きなさいと言う。お地蔵様の近くに私方にバイトで働いていたおばさんの息子がいて担架をかついでいた私と眼があった。これから済生会病院まで私にかわってと頼む。夢中だった。疲れ果てて一度担架の棒を落して怪我人が「キャッ」といった事もある。夢中だったけど土台無理なのだ。快く承知してくれて助かった。

済生会病院が駄目で、中の橋の木造の専売病院の二階の病室に入ることができた。五時間も腿裂かれ、手当もせずに来た道のり、何と長かったか。左片腿は裂け右足の指三本はちぎれる寸前、夢中で縛った防空袋の手拭は全部使い果たした。入院を許可されKさんは泣くばかり。髪を梳いてあげながら、もう安心よと言う自分も涙が溢れる。

先生も直ちに診て下さった。担架を担ぐ途中で近所の方から娘の消息を知り病院に来るよう、たのんだ。終始無口だったKさんのご主人は「こんな時ケガする御前が運が悪いのだ」と慰めておられた。年も大分違ったようだがよく辛抱して担がれた。やがて娘は来た。

「家は焼けたわ。消火につとめたがどうなる物でもなかった」とぽつんと言う。「それにしてもお母さんの顔山賊みたい。眼のふちから顔中煤だらけ」と笑う。緊張と疲労、病院にゆだねた安心感で気力がぬけたようだ。家は焼けても命があった事がせめてもの喜びと娘に言う。

五月二十六日の朝は昨夜の事は嘘のように空は晴れわたり、娘と連れだって我が家の焼跡に来た時は万感迫って言葉

もない。紅茶茶碗のふちの金色が陽にキラキラ光って転がっていた。言葉もない。それだけだ。思って見れば愛犬セパードは、いずこ？火に追われ主人を探して焼け死んだのだろうか？哀れ許してよ！と犬の霊に祈り捧げる。

病院で七ケ月過したKさんは、腿のつけ根より片足切断したが片足になっても生きていてよかったと折に触れ、電話を、よくよく会いたくなると松葉杖で笹塚から訪ねて下さる。会えば顔見合せて互いに泣くばかり。

後で慶應義塾附近はことに被害がひどく焼け死んだ人、大怪我の人数知れずとか。

戦争を知らない世代が次第に多くなってゆく現在、私の体験の一つを書き残した。

三田・慶大前にて

（港区立南山小学校元教諭　恩田孝徳画）

# 圧迫からの解放

◇佐藤　一貫（58歳）

「どーん、どーん」と暑い空気を震わせて打ち上げ花火の音が響いてくる。つい三・四日前は鶴見川だかの花火で、たまたまその日は用事で、船橋の方へ出掛けた帰りの電車の窓から、隅田川の花火を、通過する江東のビル等にいいところでさえぎられていたのが、丁度真正面で見られるかと思ったのもつかの間、電車は一瞬にして地下に潜ってしまった。

腹に「ずーん」と響く花火の音に、私はあの終戦の年、二十年の三月三日だったか六日だったかはっきりとは覚えていないが、栃木の川治温泉への学童疎開から帰京し、親の元でほっとしたのもつかの間、三月十日の東京大空襲に見舞われた。

今日のように「ずーん、ずーん」と高射砲の炸裂する音と、B29（ボーイング爆撃機）の何とも嫌な頭に重しを載せられるような響き、早くも焼夷弾によって燃え上がる下町の炎の明かりに、どこまでも濃く深い紺色の空に、万年筆に翼を付けたようなB29の鈍い銀色の巨体が浮かび、機体までには届かず下の方で、「パッ、パッ」と白い煙に成ってしまう高射砲弾、大鷲に立ち向う雀か何かのような我が方の「零戦」だか「隼」だかが飛び回り、「すーっ、すーっ」と赤い尾をひく曳光弾が虚しく花火が消えるように交差する。

目の当たりに見る実戦の模様だが、何とも歯がゆく、小さな雀が叩かれて無残に落下するのも、悔しくともいかんともしがたく、時に我が方の機銃弾が命中して、見る間に「ぱっ」と炎に包まれて落ちていくB29に、思わず手を叩いてしまう。まるで戦争映画を見ているようなものだったが、実際は頭の上からは夏の夕立の様に「ざあーっ」と空気をつん裂いて、中空で一度炸裂し散弾のようになった焼夷弾が、都電の伊達跡の停留所から長者丸まで、線路に沿った一角が強制疎開で家屋が取り壊されて、空き地になっており、その向こうは火薬庫（現、自然園）。縦穴の防空壕を掘って、その上はご近所のそれぞれが「家庭菜園」なんて今では粋にいえるが、トマトやさつま芋なんかを植えた畑に、見ている前で「ぶす、ぶすっ」とオリーブ色というか、現在の自衛隊の機材色の六角型の焼夷弾の本体が突き刺さる。不発のものもあ

る、破裂したものはあたりに炎をまき散らす。なぜか怖いとか恐ろしいとかいう感情は起きてこなかった。

実家は銭湯を営んでいたが、戦中のことで今以上に人手もなく、廃業してご多分に漏れず、内部を改造して軍需工場としたため、白金台町の方に借家住まいをしていた。しかし、そこもほんの数日で強制疎開とかで否応もなく立退き、伊達町に引っ越した。とここまで思い出したところで三月十日の大空襲は江東、墨田の方で、目の前に焼夷弾が落ちてきたのは五月二十五日の空襲の時だったかと、もうその辺は記憶もごっちゃになって、白金三光町のあたりが焼かれたのはその時だったか、目黒の理研に飼われていた馬が数頭、火に追われて長者丸の方から、エビスビールの裏門の前を狂ったように疾走して来た。今なら馬が走ってきてもそう驚かないが、目の前の野菜畑のあちこちに突き刺さって炎を上げている焼夷弾の火明かりに、白汗（雲脂―ふけ―と汗が一緒になって白泡のようになる）を流し鱗眼（うろこめ）を吊り上げたような馬の群れは地獄絵さながらだった。未だ伸び切らない玉蜀黍（とうもろこし）の穂が燃え始め、トマトや茄子（なす）の支え棒にも火が付いた。「そらっ、大変だあー」とバケツで水を掛けるやら、馬簾（バレン）モップ（荒縄か襤褸（ぼろ）布を撚（よ）った物を竹竿等の先に結びつけたもので火を叩いて消したりする）なんかを持ち出してざぶざぶ水につけて火を叩き消しにかかる。

「理研から逃げてきたんだあ」とか物知りが叫んでいるのが聞こえたり、狂ったように鼻孔をふくらませて「ふうっ、ふーっ」鼻を鳴らす馬やらで、現実に自分自身がそこに巻き込まれていることが実感として伝わってこなかった。

白金三光町から都電に詰め込まれ、停留場で互いに手を振り合って一方は栃木へ学童疎開、六年生の私等は三月に帰京したが五年生以下は疎開先で親と死に別れた児童もいただろう。空襲が激しく無試験で入学したばかりの中学も五月二十五日の空襲で焼かれ、焼け残った隣の女子部の校舎での二部授業と、私等昭和一桁は学校に対して特別な感情を持っているようだ。「ずずずずんっ」と腸を揺するように響いてくる遠くからの、連発の打ち上げ花火の音に私は空襲のことと、毎晩のように何時空襲のサイレンで起こされるか、つぎは家が焼かれるかと、絶えず重苦しくわだかまっていたのが、終戦とともに拘束衣でもはがれたような虚脱感と解放感とを同時に持ったのを思い出す。